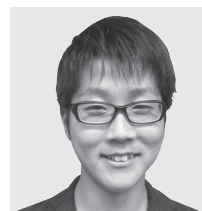


「マルコ＝ポーロ ～二つの世界をつないだ探検家～」

井上 健太郎さん
(英米語学科4年次生)

私は、図書館報194号「案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ (10)」に平成4年に開催された「コロンブスと大航海時代 ～二つの世界の遭遇～」について原稿を執筆しました。今回は、この貴重書展に出展されたマルコ＝ポーロの『東方見聞録』についてお話しします。

1254年マルコ＝ポーロは、ヴェネツィアの商人の家に生まれました。生家は、代々続く商家で彼の父ニコロは、中東貿易に従事する商人として財と地位を確立していました。

マルコが15歳になる年、ニコロは、15年間の航海から帰ってきます。それから2年間マルコは、父や叔父と生活を共にして、ヴェネツィアの商人ポーロ家の跡継ぎとして育成されました。1271年にマルコは父や叔父に連れられてヴェネツィアの港を出港して、長い旅路の末、フビライ＝ハーンの治める上都に着いたのがヴェネツィアを発つて4年後のことでした。『東方見聞録』によると、フビライの住む宮殿は、「すべて大理石で造られ、数ある広間や部屋には金箔がはり巡らされている」と記されています。フビライに気に入られたマルコは、中国で約16年間暮らすこととなります。その間さまざまな地域を訪れ、初めて触れるものや文化に驚いたことでしょう。マルコは、日本に足を踏み入れたことはありません。彼はおそらく中国の東海岸に住んでいる人からたびたびジパングのことを聞いていたのではないかと思います。『東方見聞録』には、ジパングのことを「この国の住民は、皮膚の色が白く礼節の正しい優雅な仏教徒であって、独立国をなし、国人は、誰でも莫大な金を所有している」と書かれています。マルコが東方の旅行から帰ってきてまもなくのこと、航海術に長けた彼はベネチア船隊指揮官となり、ジェノヴァ船隊との海戦に参戦しました。しかし、不運にも破れて、捕虜となりジェノヴァの牢獄に送られました。そのとき牢獄で出会ったのがピサ出身の小説家ルスティケロです。彼がマルコから聞いたフビライの豪華な宮殿や莫大な富、黄金の国ジパングなどを書き留めたのが『東方見聞録』です。マルコにとって、海外の暮らしは、新しい発見の連続だったのではないのでしょうか？読者にとっても、彼の見聞談は今までにない新鮮な経験となったに違いありません。私自身も、展示会で教科書に載っているような貴重な本を見るたび自分の世界が広がるのを感じました。私ももうすぐ社会人になります。責任のある仕事を経験し、人との出会いを大切に、マルコのように大きく成長していきたいです。

「さかさまの国 日本」

國本 茂恵さん
(英米語学科4年次生)

図書館報193号の「私の好きな昔話 (9)」で紹介したちりめん本は、明治時代に在日欧米人が日本の古くから伝わる昔話を翻訳し、その粗筋に沿って日本人絵師が挿絵を描き、手彫りの木版で上質の和紙に手作業で印刷し、それを特殊加工して縮緬状に仕上げたもので、伝説やお伽噺のほかには日本の文化について書かれたものもあります。その中で私が特に興味をもった『さかさまの国 日本』は、エミリー・パットンが日本の文化が西洋文化と異なっている点を「さかさま」として紹介したものです。表紙に描かれた子供の逆立ちなどの軽妙な技は、欧米人から見た異文化をさかさまとして強